

1. また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。
2. 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。
3. そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、
4. 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」
5. すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」
6. また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。
7. 勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。
8. しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」

説教

先週、吉川福音教会の寺田祐一牧師が召されて、葬儀の司式をしました。寺田牧師は私より15歳も年上ですが、最も親しい友人でもありました。葬儀の司式をする度に思うことですが、やはり人間というものは、いつか必ず死ぬものなのですね。どんなに健康でも、どんなに若くても、いつまでも生きているわけではありません。必ず最後は死にます。この世に生まれた人で、死なない人は一人もいません。どんなに健康に注意しても、どんなに身体を鍛えても、無理しないよう養生しても、そして、どれだけ長生きしても、最後は必ず死ぬのです。遅かれ早かれ死にます。ですから私たちには、いつ死んでもいいように、死ぬ備えが必要だと思います。

昔、田舎で代用教員をしていたある人が、雷に遭って死ぬほどの恐怖を味わい、その時、自分には死ぬ備えができていなかったと気づき、死が何かを知った上で、自分の生き方を考え直そうと求道生活を始めた、という証しを聞きました。結局その人は教会に行き、イエスさまを信じて牧師になりました。その人が悟ったように、生きることを熱心に考える前に、「死」とは何かを考え、その上で自分がどう生きるかを考え直すことはとても大切なことだと思います。

それでは、「死」とは何でしょうか？人間の罪に対する神の怒りです。「罪から来る報酬は死」なのです(ローマ6:23)。最初の人アダム以来、人は神に背いて生きてきました。元々人間は死にませんでしたが、罪を犯してから人は死ぬようになります。エデンを追い出されます。このように、「死」とは人間の罪に対する神の刑罰なのです。だから、人は死ぬことに恐怖します。死にたくありません。それは死後のさばきを直感するからです。こうして人は自分の罪のために死刑となります。そして、人生は死刑執行を待つだけの猶予期間と化すのでした。

「死」は死刑だと説明しました。それでは、人は死んだらどこへ行くのでしょうか。すべての人は罪を犯したのですから、そのままなら間違いなく地獄行きです。黙示録21章8節には「火と硫黄との燃える池」というのが登場

しますが、これが地獄です。神の燃える怒りがグツグツ煮えたぎる「火と硫黄との燃える池」、それが地獄です。すべての人は罪を犯したのですから、当然この地獄に行かねばなりません。しかし神は、罪人を見捨てることなく、憐れみ、ひとり子イエスさまを十字架につけて、私たちのすべての罪を精算してくださいました。神がくださったこの身代わりのいけにえによって罪赦されて、私たちは地獄の刑罰を免れることができます。そして天国に行くことができます。

これにより、私たちの前には二つの道があることとなります。それは天国への道と地獄への道です。そして、どういう人が天国に行くかと言えば、イエスさまを信じる人です。神がくださったキリストにある救いの恵みを単純に受け入れて信じる人です。一方、どういう人が地獄に行くかと言えば、イエスさまを信じない人です。すなわち、神が与えてくださったキリストにある救いの恵みを侮り、馬鹿にして、受け入れない者は、自分で自分の罪を精算しなければなりません。それは、神の怒りとさばきを自分がそのまま受けることを意味します。すべての人は神に罪を犯したので、すべての人は例外なく神のさばきを受けなければなりません。キリストにあつてそれを受けると、それとも自分が直接まともにそれを受けると、私たちには二つに一つの選択しか許されていません。

今日の黙示録 21 章 8 節にはこうあります。「しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拜む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」人殺し、姦淫、魔術、偶像崇拜、嘘つき、その他あらゆる悪徳を働く「憎むべき者」、そして「不信仰な者」は天国に行くことができず、「火と硫黄との燃える池」、すなわち地獄に投げ入れられると言われます。これを目撃して記録したのは使徒ヨハネですが、彼は自分のなし得る最大限の表現で地獄を描写します。

これによると、地獄には「火」が燃えています。これだけでも熱くて恐ろしいのですが、これに「硫黄」も付け加えられます。「硫黄」と言えば、温泉地、火山を思い起こします。熱湯と熱気と煙が勢いよく吹き出る地獄谷で、かつて切支丹は熱湯に投げ込まれて殺されました。しかし、この地獄はお湯の地獄ではなく「燃える池」と言われるように「火の池」です。それは火山の下でボコボコと音を立てる溶岩・マグマのようです。神に背くソドム・ゴモラをすっかり焼き尽くしたのは、天から降って来た「硫黄の火」でした。黙示録では、神のさばきの空襲と火炎放射による灼熱地獄で、人類の三分の一が「硫黄の火」で焼き殺されました(9:8)。

しかも、これは「第二の死」と言われます。「第一の死」は肉体の死を意味しますが、「第二の死」は靈魂の死を意味します。戦火にしろ溶岩にしろ、肉体の死ならば、ただ一回死ねばそれで終わりです。でも魂や靈魂なら、それは永遠に死ぬことはありません。なぜなら死んでも人の靈魂は生き続けるからです。靈魂は不滅です。そして、その靈魂が「火と硫黄との燃える池」に投げ入れられるというのですから、それは終わりなく永遠にその中で焼かれ続けることとなります。どんなに苦しい人生でもいつか終わりがあるならば、その時を思ってどうにか耐え忍ぶことができます。でも一度地獄に投げ入れられたならば、終わりはありません。いつまでもいつまでも、ずうっと際限なく、終わりなく焼かれて、ひたすら苦しみ続けることとなります。これが地獄です。死後は靈魂が苦しみ、終わりに日には肉体とドッキングして、身も魂も永遠に苦しむこととなります。

そして極めつけは、ここに神はおられません。なぜなら地獄は神に見捨てられた者たちが入れられる所だからです。終わりのない苦しみをずうっと苦しみ続けるのですが、助けてくれる者がいません。誰も助けてくれません。地獄に落とされた者たちは、容赦なく苦しめる永遠の炎の中で、「わが神、わが神、どうして私を見捨てたのですか」と永遠に泣き叫ばなければならないのです。何と酷い場所だろうかと思いますが、酷いのは実は人間の罪の方です。「おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拜む者、すべて偽りを言う者ども」と罪状を数え上げられていましたが、それぞれの罪状に応じた正しい責め苦でさばかれて

いるに過ぎません。やったようにやられるのです。殺したように殺され、無視したように無視されます。生前神にやったように自分もやられるのです。

これに対して、天国は全く正反対の所です。何より天国には神がおられます。私たちが信頼してやまない神がその中心におられます。神が、私たちの罪を赦し、私たちと共におられて、共に住んでくださいます。そして地上での労をねぎらい、慰めて、「目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる」のです。天国には「もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみも」ありません。そこにあるのは、天使と24人の長老と聖徒たちの讃美です。神をほめたたえる讃美です。自分たちを罪と滅びから救ってくださった恵み深い神をたたえる讃美が爆発しています。そして人々は、「神の御座の前にいて」、救われた喜びと感謝をもって「聖所で昼も夜も神に仕えている」のです(7:15)。「昼も夜も」とは、勿論天国には暗い「夜」など無いのですが、悪魔に邪魔されず、何にも妨げられず、何の制限も障害もなく、食べる患いも寝る必要もなしに、思い切り神に仕える、という意味です。

召された寺田先生は、最後は肝硬変と肝臓癌のために、無理するとその後疲れ切って全く動けなくなってしまうので、奉仕したくても奉仕できない状態で「悔しい」と言っていました。天国ではそんな制限もありません。疲れることなく、倦むことなく、自由に、思う存分、へばらず、仕えます。嬉しくて、楽しくて、奉仕したくても奉仕したくても仕方がない、神の恵みに満ち、恵みに満ち溢れて、不死身のからだで、永遠にひたすら「神に仕え」ます。天国には神の恵みの栄光が全域に輝き渡っているのです。

地上では、人々は貧しく罪深い人間の説教者を通して神のことばを聞きます。しかし、天国では神が直接人々を教えます。人々は神の御顔を直接仰ぎ見、神から直接教えられます。それで、何の一点の曇りもなく、人は神の恵みの栄光に照らされ、頭の前から足のつま先に至るまで100%聖霊に満たされ、神の恵みに満ち満ちて、神をたたえ、神に仕えるのです。

神は言われます。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。」(6)「勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。」(6)

ある牧師は、自分が今死のうとしている直前に、後輩の牧師にこう言いました。「おい、君。もう余計なことは言うな！無駄なおしゃべりはやめろ！必要なことはただ一つだ。天国か地獄か、天国に行くか、それとも地獄に行くか。」究極、福音の神髄は天国への道です。そのためにキリストは世に来て、福音を伝え、十字架で死に、復活されました。そして、再びこの世に来られます。

キリストを信じて、天国に行ってください。